

世帯構造とライフコース—幕末期美濃国人口史料を利用して—

金親 真理子・黒須 里美

キーワード：世帯、ライフコース、宗門改帳、歴史人口学

要旨

本研究の目的は幕末期美濃国（現在の岐阜県）の宗門改帳を用いて、世帯構造とライフコースの実態を明らかにすることである。データは1844年から1870年の7ヶ年、34ヶ村、のべ13,000人を網羅するセンサス型である。年齢構造や性比を含めた人口構造と世帯構造を明らかにし、世帯構成員の年齢別割合や静態平均初婚年齢（SMAM）などから結婚、離家、戸主交替などのイベントとのつながりを探る。さらに分析結果を同地域の西条村の時系列データによる研究成果と比較することで、美濃地域の人口・世帯における特徴を近代移行期の日本の地域性のなかに位置づけることを試みる。

1. 研究の目的と背景

本研究は幕末期の美濃国（現在の岐阜県）の宗門改帳を利用して、近代移行期の世帯構造と男女のライフコースを明らかにする。この時期は日本全体で持続的に人口が増加して、経済が発展し市場経済に移行した大変革期であり、現代社会の基層になっていると考えられている。

長期的に残存する史料をベースとするこれまでのマイクロ歴史人口学では、各地に点在する村々の情報を総合することで、近代移行期の世帯とライフコースの特徴をつかんできた（速水1992, 落合編2006, 浜野2011, 黒須編2012など）。一方、マクロ歴史人口学では、幕府人口調査の終わり1846年から明治初年までは、「空白の四半世紀」と呼ばれ、人口統計の手がかりがないとされる（速水1983, 斎藤2001:67）。このような中で黒須（2005, 2008）は、従来の日本の歴史人口学では活用されてこなかったセンサス型（単年）資料から様々な推計方法を用いることによって、19世紀の結婚・出生動向とその地域性をつかむ可能性を示した。本研究もその視点と方法にならい、美濃国1844年から1870年の7ヶ年（1844, 1845, 1859, 1860, 1861, 1868, 1870年）、10郡、34ヶ村のデータを活用することによって、これまでの「点」を中心とした美濃地域の研究（速水1992, 中里2006, 浜野2011など）を「面」的に広げて特徴を明らかにする。この時期は1833年に始まった天保の大飢饉が終わり、人口が回復してきた時期とされる。単年の情報ではあるが、世帯と個人のまとまった情報が残る史料により、江戸時代末期の人口が把握で

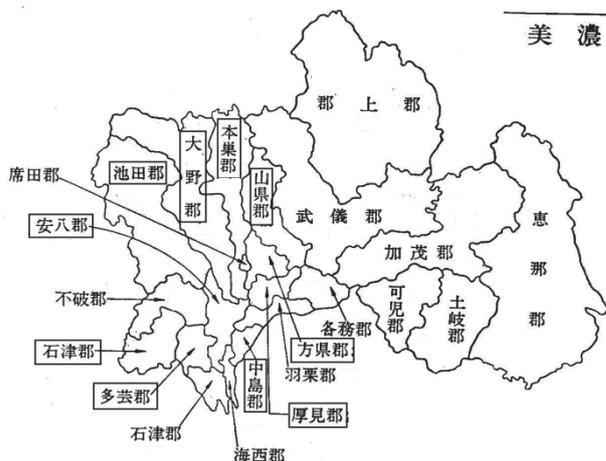
きるだろう。

研究対象地域である美濃は、家族・世帯構造において「東北日本型」「西南日本型」と呼ばれ、現代家族にも影響があるとされる地域的分類でいえば「西南日本型」にあたる(清水 1997, 加藤 2009)。直系家族型の「東北日本型」に比べると「西南日本型」は核家族世帯が多いのが特徴である。明治統計を利用した結婚率の研究では、フォッサ・マグナの西側で晩婚地域とされる(速水 2009: 132-136)。さらに速水(2009)による家族・人口の3パターン(「東北日本型」「中央日本型」「西南日本型」)の中で美濃は「中央日本型」に位置する。奉公に出る者は結婚以前の男女であり、そのため相対的に晩婚であったことが「中央日本型」の特徴である。世代間間隔は長く核家族の形態をとり、農村から都市への奉公パターンが死亡や結婚に影響したと考えられている。結婚(黒須・津谷・浜野 2012)、労働移動(永田 2006)、同居(中里 2006)、戸主交替(Okada and Kurosu 1998)などの比較分析結果は速水の3地域仮説を支持する。しかし、これらはみな美濃国安八郡の1村である「西条村」の宗門改帳を利用した研究成果である。欠年なく100年継続する宗門改帳のデータからさまざまな詳細はわかるものの、その代表性は検証されていない。西条村の特徴は、安八郡の、また美濃国の特徴といえるのか。単年ではあるものの34ヶ村を網羅する本研究のデータによって、この問いに迫ることができるだろう。

本稿では、まず史料とデータについて述べ、単年データの特徴を示す。分析では、人口指標の基本となる人口構造について34ヶ村全体の特徴をつかみ、次に地理的・時代的比較を行う。さらに世帯構成員の年齢別比率をみることによって世帯構造からライフコースを探る。その結果は西条村をベースとする長期的研究の成果とのつながりを示すのみでなく、「中央日本型」としての人口・家族構造の特徴を検証し、さらに近代移行期日本の地域性の違いを語る大切なステップとなるであろう。

2. 研究対象地域とデータ

本研究の対象地域は美濃国の10郡である。現在の岐阜県にあたる。木曾・長良・揖斐の三河川が交錯する平坦な輪中地帯で、地味は豊かであるが、一たび洪水になると全村水没という危険もある地帯であった(速水 1992: 181)。地図1は美濃国の各郡の位置を示している。四角で囲っている10郡が残存する史料のある研究対象郡である。



地図1 美濃国の研究対象郡
『旧高旧領取調帳-中部編』より作成

本研究で利用するのは、幕末美濃国10郡34ヶ村に残存する単年の「美濃国宗門改帳」である。オリジナル史料は現在、徳川林政史研究所に所蔵されている。10郡には安八郡、厚見郡、多芸郡、中島郡、石津郡、方県郡、山県郡、大野郡、池田郡、本巢郡が含まれる。残存している年は村によって違い、全体で7年（1844, 1845, 1859, 1860, 1861, 1868, 1870年）にわたっている。宗門改帳とはキリスト教を禁止し、全国民が仏教徒であることを村・町ごとに証明させた文書である。速水(2009: 561)によると、1638（寛永15）年、幕府所轄地に宗門改が実行されるようになり、さらに、1671（寛文11）年には、国内の全領主にまで拡大して実施されることになった。幕府から一定の書式、調査作成の方法が示されたわけではないので、幕府直轄地、各大名領、代官支配地それぞれによって内容が異なっていた。このため、村によって奉公、結婚、出生情報の詳細に違いがあったり、持高の有無だけではなく、石高まで詳細に記載されているものもあるという。本研究で利用する史料も34ヶ村にまたがるため、多少の記載の違いはあるが、どの村の史料も、典型的な宗門改帳（木下・浜野 2003: 53）とされる世帯ごとの檀那寺の印鑑、世帯構成員の名前・年齢・続柄を含んでいる（写真1）。現代でいえば国勢調査にあたる情報であり、単年とはいえ、これらを利用することによって人口構造や世帯構造を明らかにすることができる。また、村によっては出生、死亡、婚姻などの人口動態情報や持高の記載があり、世帯の静態情報をあわせるとさまざまな推計が可能である。

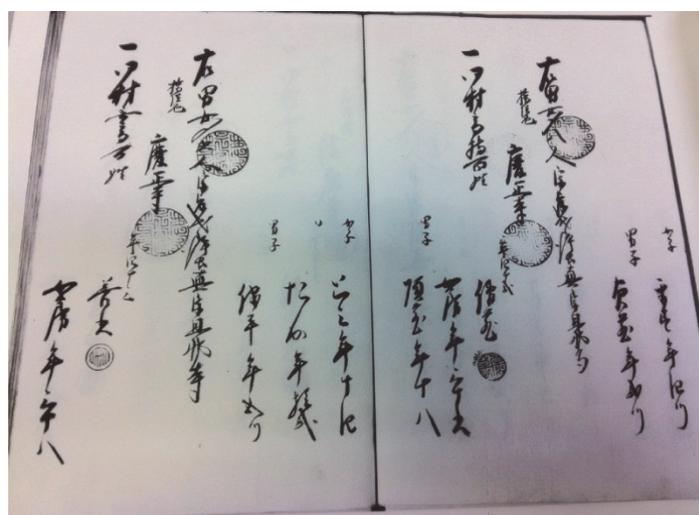


写真1 宗門改帳（美濃国南条村1868年：徳川林政史研究所所蔵）

オリジナル史料の解読から基礎整理シートへの記入整理および、コンピューター入力作業が麗澤人口・家族史研究プロジェクトによって行われ、それは麗澤アーカイブに所蔵されている。本研究ではまずこの入力データのデータクリーニング、史料の整合性のチェックなどを施しデータベースの拡充を図った。単純な入力の実誤のチェック、論理的な整合性のチェック、必要な場合においては、原史料の確認を行った。例えば、性別は女のはずなのに、続柄が「弟」と入力されていたり、年齢が10歳に満たないのに、

「嫁」となっている場合など、様々である。後者のケースなどは、「嫁」と「娘」の入力ミスなのか、原史料上の間違いなのか、あるいは、実際に年若くして嫁に来たケースなのか、辛抱強くその内容をチェックする必要がある。また、複雑な論理になるほど(例えば母と子の照合など)、分析を手がけてはじめて判明するエラーもあるため、その都度、オリジナルデータを修正しながら、分析のやり直しをする必要がある。簡単にプログラミングで済ませられない、歴史人口学資料ならではの難関である(黒須 2008)。

研究対象データに記載されている内容は国名、郡名、村名、和暦、西暦、月(お調べ月)、村役員地位、宗派、寺院、高持、家畜、名前、年齢、性別、続柄、出生・死亡情報、奉公情報などである。これらの記載情報から人口指標、静態指標を算出し、さらに静態情報(宗門改年時点での情報)と動態情報(結婚などのイベント)とをあわせることでスナップショット的にライフコースの特徴を探る。なお、以下の分析で「年齢」は宗門帳に記載されている年齢をそのまま利用する。また、具体的な分析方法はそれぞれの分析結果の前に述べる。

3. 分析・結果

(1) 人口指標：郡別年代別分析

まず1844年から1870年中7ヶ年の10郡34ヶ村を集計し全体人口を把握する。人口は13,584人で男子7,023人、女子6,561人である(表1、付録1)。付録1の人口ピラミッドをみると、11歳以上はきれいなピラミッド型を描くが、1~5歳の年齢階級は極端に人数が少ない。これは史料への登録漏れや乳児死亡が記録されていない点が考えられる。速水(1992: 160)によると、新しく出生した者の登録が統一されていないという問題が考えられるという。例えば、ある年には数え年1歳の者は全く記載されず、ある年には1歳から記載されている場合があるため、慎重に扱わねばならないと忠告する。

男女性比は各年齢グループで差はあるものの、全体でみると107であるため、この結果は正常値の範囲内である。正常と認められる数値は103から107といわれ、この範囲を超えると何らかの原因で男性過多、または女性過多といわれる。一般的に特に乳幼児の場合、107を大きく超えた場合は、人為的な間引きによる出生制限や女兒の史料への記載漏れも考えられる。男女年齢階級別人口構成と性比をみると、26~30歳で123.9と高い数値である。この年代は男性の奉公入の移動が多く行われる年代であり、そのため男性過多になった可能性が考えられる。

全世帯数は2,939世帯で平均世帯規模は4.62人である(表1)。同じ美濃国西条村の長期にわたるデータを利用し、実証研究を行った速水(1992)によると、西条村の同時期(1773~1869年)における平均世帯規模は4.17人から4.83人である。美濃国の平均世帯規模4.62人は西条村の数値内である。

表1 郡別人口指標 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村

	平坦部				丘陵部					
	安八郡 5ヶ村	厚見郡 2ヶ村	石津郡 1ヶ村	多芸郡 1ヶ村	中島郡 1ヶ村	方県郡 4ヶ村	池田郡 6ヶ村	本巢郡 3ヶ村	山県郡 2ヶ村	大野郡 9ヶ村
人口	13,584	485	155	575	690	1,643	813	2,981	896	2,715
男子	7,023	251	82	293	322	842	419	1,615	447	1,457
女子	6,561	234	73	282	368	801	394	1,366	449	1,258
世帯数	2,939	576	30	123	129	362	199	667	191	561
平均世帯規模	4.62	4.54	5.17	4.67	5.35	4.54	4.09	4.47	4.69	4.84
男女性比	107.0	107.3	112.3	103.9	87.5	105.1	106.3	118.2	99.6	115.8

表2 郡別1世帯あたりの夫婦組数 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村

	平坦部				丘陵部					
	安八郡 5ヶ村	厚見郡 2ヶ村	石津郡 1ヶ村	多芸郡 1ヶ村	中島郡 1ヶ村	方県郡 4ヶ村	池田郡 6ヶ村	本巢郡 3ヶ村	山県郡 2ヶ村	大野郡 9ヶ村
合計	33.9	31.7	3.3	27.6	27.9	28.7	37.2	36.7	35.1	35.1
0組	57.4	63.4	80.0	65.0	59.7	63.0	58.8	54.0	54.5	51.7
1組	7.9	5.0	16.7	6.5	10.1	8.0	4.0	8.4	10.0	11.1
2組	0.8			0.8	2.3	0.3		0.9	0.5	2.1
3組以上	2,939	576	101	30	129	362	199	667	191	561
世帯数										

表3 郡別1世帯あたりの世代数 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村

	平坦部				丘陵部					
	安八郡 5ヶ村	厚見郡 2ヶ村	石津郡 1ヶ村	多芸郡 1ヶ村	中島郡 1ヶ村	方県郡 4ヶ村	池田郡 6ヶ村	本巢郡 3ヶ村	山県郡 2ヶ村	大野郡 9ヶ村
合計	15.1	9.9	10.0	14.6	7.8	9.9	19.1	18.0	11.0	18.2
1世代	63.0	63.4	53.3	67.5	62.0	62.7	58.8	63.3	61.8	60.4
2世代	21.8	26.7	36.7	17.9	30.2	27.4	22.0	18.7	27.2	21.4
3世代以上	2,939	576	101	30	129	362	199	667	191	561
世帯数										

表2は1世帯に夫婦が何組いたのかという夫婦組数を表している。結果は1組が57.4%で最も高く、1世帯に夫婦が1組いる家族形態が全体の半数を超えていることがわかる。次に多いのが0組で33.9%である。これは夫婦がいない世帯であり、単独世帯が多かったことが示唆される。更に夫婦組数0組を分析すると、1人で暮している割合が0組の全体の約25%であった。夫婦組数の分析で、1世帯に夫婦が3組以上が0.8%という分析結果になった。これは同じ世帯に兄弟夫婦が同居している場合や、わずかではあるが住み込みで働き、家事の手伝いをしていた下男・下女の夫婦も組数にカウントされるためである。表3は世代数の分析結果である。世代数とは1世帯に何世代が一緒に暮らしていたかを示している。配偶者がいない(未婚・離死別者)場合でも1世代とカウントされる点が表2の夫婦組数との違いである。分析の結果、2世代で構成される世帯が最も多く63.0%である。次に3世代以上の21.8%、1世代の15.1%となっている。

次に郡別に分けて美濃国内での地理的な違いを比較する。研究対象地域の10郡のうち平坦部に位置する郡は安八郡、厚見郡、多芸郡、中島郡、石津郡、方県郡である。丘陵部に位置するのは山県郡、大野郡、池田郡、本巣郡である。丘陵部と分類した4郡は、地理的に見ると山間地帯に近いが、本稿で分析した村の位置は比較的平坦な地帯に位置する村が多い。したがって山間部とは言えず、やや山間部に近い丘陵部と呼んだ方が適切と考えて丘陵部と区分して分析をすすめた。ここでの比較は便宜上、郡というまとまりにしているが地理的な違いを考察することが目的である。

表1の男女性比は87.5~118.2とばらつきがあり、地理的特徴はつかめない。平均世帯規模(表1)をみると、平坦部では中島郡の5.35人が最も高く、丘陵部の平均世帯規模は大野郡の4.84人が一番高い。このことから平均世帯規模は平坦部のほうが丘陵部よりも大きかった傾向が明らかになった。

次に郡別夫婦組数を分析した(表2)。各郡とも1世帯に夫婦が1組いる世帯が最も多いことがわかる。平坦部と丘陵部で分けてみると、平坦部では夫婦組数が1組の割合が約60%を超える。丘陵部では池田郡の58.8%が高いが、他の郡は55%を下回っている。夫婦組数0組は平坦部では安八郡の35.6%が最も高いが、他の郡は30%を下回っている。逆に夫婦組数0組は丘陵部のどの郡でも35%を超える高い結果が出た。このことから、平坦部より丘陵部の郡の方が単独世帯が多かった可能性が考えられる。速水が分析した西条村のある安八郡は平坦部に位置し、1773~1869年間の夫婦組数0組の平均構成比率が32.2%という結果になっている(1992: 203)。本稿の安八郡の夫婦組数0組の分析結果は35.6%であり、速水の結果と合わせて考察すると、平坦部の中でも安八郡は単独世帯が多かったことが明らかになった。

表3は郡別世代数を表している。どの郡も1世帯に2世代で構成された世帯が最も多く、次に3世代で構成される世帯と続く。1世代の割合は平坦部では10~15%である。しかし、丘陵部の1世代の割合は山県郡で11%と低いが、他の3つの郡は20%近い結果がでた。34ヶ村の15.1%と比較すると平坦部ではそれぞれ15%以下となっているが、

丘陵部は4つの郡のうち3つが15%を大幅に超えている。つまり、平坦部より丘陵部の地域の方が1世代で暮す人が多く、夫婦組数の結果と合わせて考察すると、丘陵部の単独世帯が多かった可能性が高くなる。

結果として、郡別に分け平坦部と丘陵部の地理的比較をすると、平坦部より丘陵部の地域の方が1世代で暮す世帯が多く、また配偶者がいない(夫婦組数0)、単独世帯がより多い傾向がみられた。速水によると尾張の平坦部と美濃の山間部の農業労働に牛馬利用度の地域差がかなりあった(1992:29)。このような農業労働による要因が、美濃国内での世帯構造の違いに反映された可能性は別途探してみたい。

次に年代を史料の残存状況から1844-1845年、1859-1861年、1868-1870年の3つに分けて分析した。3区分にすることで各年代の間隔が約10年間であり、10・20年間の変化を追える。一般的に歴史人口学の分析では、1830年代の天保の飢饉以降を幕末明治に向かう近代的成長への大きな変化の期間として捉えている。その意味では1つにくくられる期間であるが、複数村を用いた特色を生かしてあえて3つの下位分類で分析していく。

表4の男女性比は1844-1845年では112.7、1859-1861年では108.5、1868-1870年では105.1と年代が経つにつれて正常値の範囲内になっていることは注目に値する。年代別人口指標の平均世帯規模(表4)をみると、1844-1845年では4.16人、1859-1861年では4.63人、1868-1870年では4.71人と徐々に世帯人員が多くなっている。これは西条村の平均世帯規模が江戸時代末期から明治初期にかけて高くなった傾向(速水1992:196)が本研究対象地域でも表れているといえよう。

表5の年代別夫婦組数をみると、各年代とも1組が一番高い数値で半数以上である。各年代とも次に0組で約30%となっている。このことから夫婦が1組または0組の世帯が全体の8割を超え、比較的小さい世帯が一般的であったことを示唆している。

表6の年代別世代数をみると1世帯に2世代という構成が最も多く、約6割を超えている。1世帯に1世代という構成が1844-1845年の20.3%から1868-1870年では13.8%と減少している。しかし、逆に3世代以上が1844-1845年の14.0%から1868-1870年では23.9%と約10%増加している。このことから、同じ世帯に複数の世代が一緒に暮らす、多世代家族が多くなった傾向がみられる。

このように幕末の4半世紀とはいえ、平均世帯規模が4.16人から4.71人と大きくなり、男女性比も明治に近くなるにつれて安定的な数値の範囲内になったことが明らかになった。また速水(1992:197)によると西条村の史料の残る1773年時からすでに小家族が普遍的だったことが確認されている。しかし、世代数で分析してみると世帯の中に3世代が一緒に暮らす割合が高くなっており、多世代化家族が多くなった傾向も年代別分析により確認することができた。

表4 年代別人口指標 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村より作成

	1844・1845	1859・1860・1861	1868・1870	1844~1870合計
人口	1,395	4,926	7,263	13,584
男	739	2,563	3,721	7,023
女	656	2,363	3,542	6,561
世帯数	335	1,063	1,541	2,939
平均世帯規模	4.16	4.63	4.71	4.62
男女性比	112.7	108.5	105.1	107.0

表5 年代別1世帯あたりの夫婦組数 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村

	1844・1845	1859・1860・1861	1868・1870	1844~1870合計
0組	38.5	31.9	34.2	33.9
1組	54.6	59.2	56.8	57.4
2組	6.9	8.0	8.0	7.9
3組以上		1.0	0.9	0.8
世帯数	335	1,063	1,541	2,939

表6 年代別1世帯あたりの世代数 7ヶ年(1844~1870年)34ヶ村

	1844・1845	1859・1860・1861	1868・1870	1844~1870合計
1世代	20.3	15.4	13.8	15.1
2世代	65.7	63.1	62.4	63.0
3世代以上	14.0	21.5	23.9	21.8
世帯数	335	1,063	1,541	2,939

(2) 続柄からみる世帯とライフコース

世帯の特性として、世帯にはどのような人たちが一緒に暮らしていたのだろうか。戸主との続柄別世帯人員割合から分析する。この方法は斎藤(2002)が、リチャード・ウォール(1983)の論文で示した世帯の特性の比較表が有効であるとして活用した方法である。この方法とは、同居親族集団(co-resident kin group)の戸主に対する関係別の構成と、その親族集団の規模を、100世帯当たりの値で表すことにより、厳密な比較検討の指標にするものである。黒須他(2005: 55)によると、単年の史料を用いて世帯構造の観察をおこなう最大の問題点は、そのサイクルを解明することが出来ない点にある。しかし、どのような親族とともに暮らしているかを観察することにより、一般的なライフコースのパターンを見出すこともできるであろう。直系家族を志向しているのであれば、全体の中で直系親族の(親や孫との同居)割合が高くなり、また複合家族を志向しているのであれば、キョウダイや叔父・叔母、また甥・姪などの傍系親族の割合が高くなるはずである。

表7は1859年4ヶ村(上野村、折立村、南条村、飯田村)と1868年10ヶ村(上野

村、折立村、南条村、飯田村、乙原村、鷺山村、西横山村、大浦村、東横山村、北今ヶ淵村)の結果を示している。この年代の各4ヶ村、10ヶ村はどの村も世帯数が50世帯程度であり、各村の人口が200人を超えているため安定した統計結果がでるだろう。1859年は256世帯1,222人、1868年は729世帯3,409人である。

まず戸主を男女別で比較すると、男性の戸主割合は92.5%で女性の戸主割合は7.5%である。戸主であり配偶者がいた人は64.6%に留まっていることがわかる。子供は2人台であり、戸主が子供の配偶者と同居している割合は9.5%と低い。親との同居も約30%であり、親との同居が絶対的な習慣ではなかったようだ。孫との同居も14.9%と低い。キョウダイとの同居は33.9%と高い数値だが、キョウダイの配偶者との同居は2.6%と低い。戸主と同居しているキョウダイは未婚者が多く、結婚すると世帯を分けて離れて暮らしていたようだ。これについては以下でさらに詳細を探る。その他の親族とはおじ・おば・甥・姪などを指す。その他の親族も7.1%と低く、一緒に暮らすことはあまり一般的ではなかったと考えられる。

表7 戸主との続柄別世帯人員割合 (%) 1859年・1868年 14ヶ村

戸主	戸主(男)	戸主(女)	配偶者	子ども	子どもの配偶者	親
100	92.5	7.5	64.6	201.7	9.5	29.4
<世帯数>		孫	キョウダイ	キョウダイの配偶者	他の親族	その他・不明
985		14.9	33.9	2.6	7.1	14.2

観察年における戸主の平均年齢は、男性で45.6歳、女性は47.3歳である。単年データからでは、戸主継承がどのタイミングで行われたのかは明らかにできない。しかし、年齢別戸主割合を分析することで、どの年齢で戸主割合が高くなりはじめ、どの時点で低くなるのかが明らかにできるだろう。

図1は男性の年齢別戸主割合である。女性戸主が少ないため、ここでは男性戸主のみを扱う。図1をみると、戸主割合が増え始めるのは21～25歳の階級だとわかる。30代前半までの戸主割合は約40%で留まっているが、36～40歳の年齢階級になると戸主割合が75.7%となり、30代前半と比べると30%以上も増えている。そのあとも年齢階級が上がるにつれて、戸主割合も上昇し、51～55歳の年齢階級で最も高くなり98%を超える。そのあとは年齢とともに割合は下がるが、71歳以上になると戸主割合は急激に減少していく。これは西条村における男性の死亡率が60歳代後半から70歳代の前半で高くなっていること(速水1992:240)、また世帯主であった男子が隠居する平均年齢が70歳(速水1992:292)であったことと符合する。ただし、地域的にみると岡田・黒須(Okada and Kurosu 1998)の戸主交替の契機の研究で、西条村では100年間の観察期間中179件が戸主の死亡による交替、77件が隠居による交替と、死亡による戸主交替が隠居の2倍以上であった。逆に、東北農村では大半が隠居による戸主交替であった。これらをあわせると、戸主の多くは死ぬまで戸主であり続け、戸主の継承は世帯主が死

亡した時に移転されることが多いのが西条村の傾向であり、また美濃地域の特徴であるといえよう。

図1 年齢別戸主割合（男性） 1859年・1868年 14ヶ村

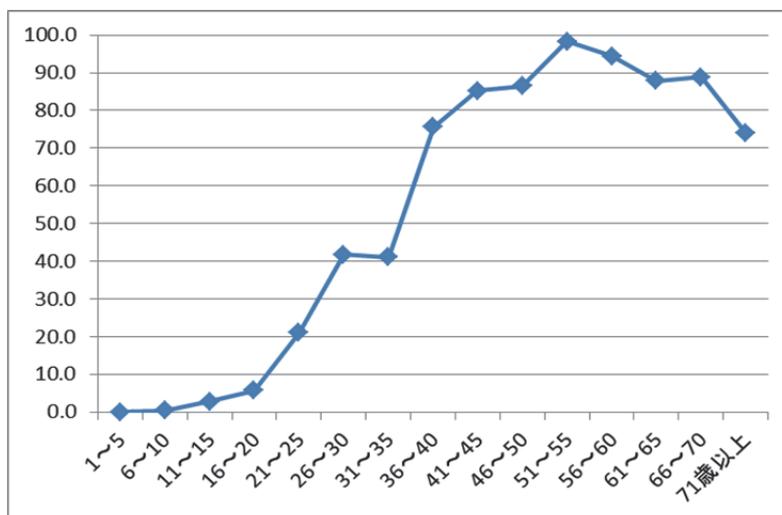


図1と同じ方法で、戸主に対するさまざまな続柄の同居人口割合をみると、世帯内でおきている人口動態パターンと世帯の構成原理が垣間見れるだろう。まず、戸主の「妻」の割合をみると（図2）、妻の割合は20代から上昇し45歳で最も高くなっている。その後、46~50歳で一度割合は減るものの、51~55歳くらいまでは高い割合である。ここから女子の結婚は20代前半から行われていたことがわかる。40代後半に割合が減少するというのは、妻との離死別があったと考えられないだろうか。しかし、また50代前半で割合が増えていることは、再婚の可能性もうかがわれる。56歳以降の割合は再び下がるが、これは妻との死別が要因であろう。西条村の研究によると、全国的に見て晩婚ではあるものの、その後の離婚・再婚も少なくない（黒須・津谷・浜野 2012；斎藤・浜野 2012）。これらの研究で扱われた西条村の結果は美濃地域全般にいえることなのではないか。

図3は戸主に対して「父」「母」という続柄をもつ人口の年齢別割合である。ここでは父母を一緒に計算している。親の割合が高くなるのは56~60歳前後と考えられる。先にみた戸主割合のピークが51~55歳（図1）であり、その後70歳を超えるまで約70%以上の男性が戸主を務めていた。このことを重ねてみると、51~55歳あたりから戸主の死亡または隠居という理由で戸主の交替が行われはじめたことがわかる。また、隠居慣行が少ない地域であるため（Okada and Kurosu 1998）、前戸主（父）死亡後にその配偶者（母）のみが残り図3にみる割合が増加したことが考えられる。

最後に図4は戸主に対する年齢別キョウダイ（「兄」「弟」「姉」「妹」）の割合である。キョウダイの割合が最も高いのは21~25歳の年齢階級である。戸主割合が高くなる36~40歳の階級時にキョウダイの割合は下がっている。ここに直系家族世帯の世帯原理

を垣間見ることができる。つまり、キョウダイのうちのひとりが戸主となると、その他のキョウダイ（傍系親族）はその世帯を離れる（離家）という原則である。直系家族世帯において、キョウダイの離家（結婚、奉公、引越など）のタイミングは、戸主（または戸主候補）の結婚や出産のタイミングに大きく影響されていた（黒須 2001）。間接的ではあるものの、図1と図4のグラフを合わせてみることで、美濃地域においてもそのような世帯の戦略があったことをうかがわせる。図4でもう一つ興味深いのは、一度減少したキョウダイ割合が46～50歳でもう一度上昇していることである。一度離家したキョウダイが離死別を体験して戻った可能性が考えられるだろう。

図2 年齢別戸主の妻の割合 1859年・1868年 14ヶ村

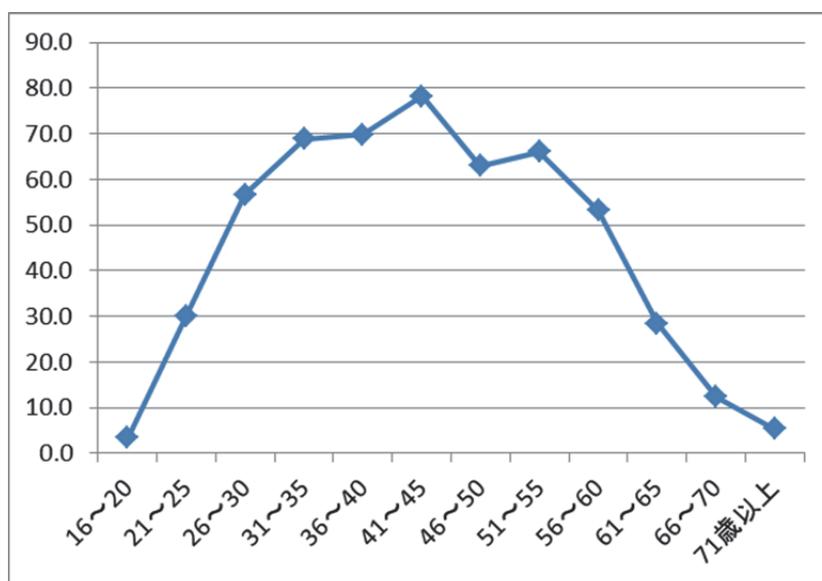


図3 年齢別戸主の父母の割合 1859年・1868年 14ヶ村

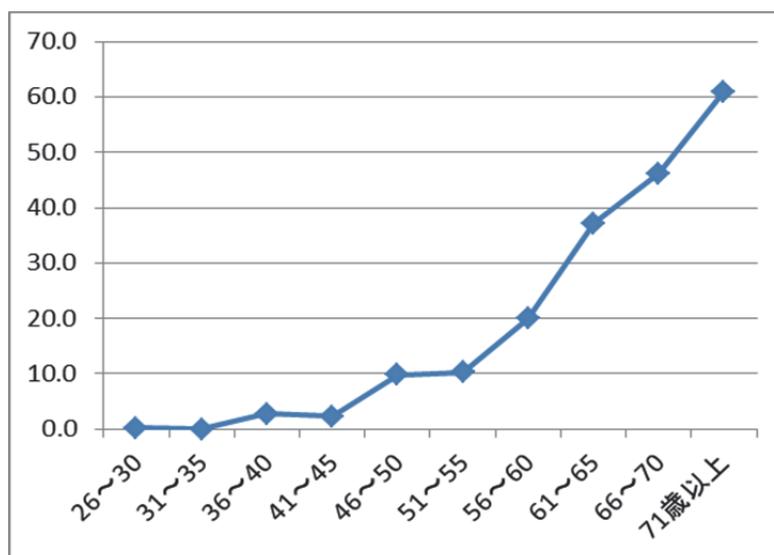
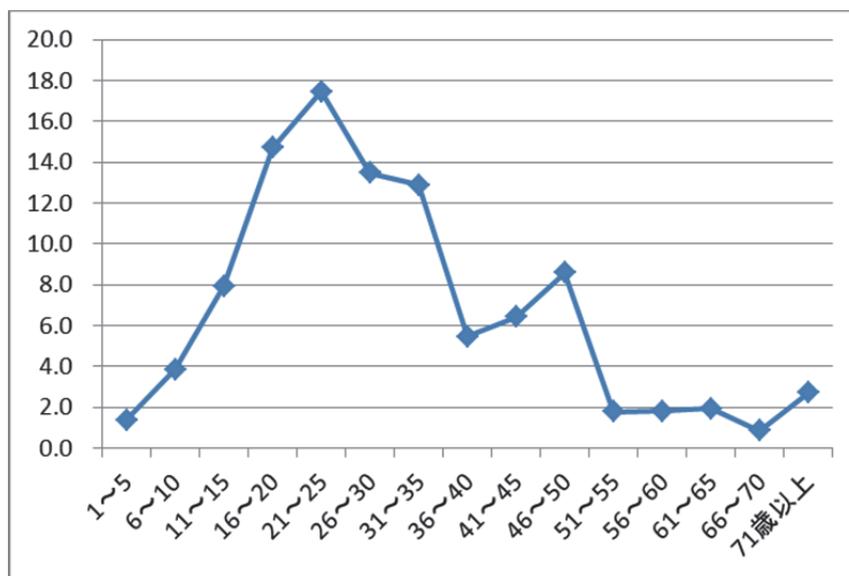


図4 年齢別戸主のキョウダイの割合 1859年・1868年 14ヶ村



(3) 結婚：SMAM（静態平均初婚年齢）と平均結婚年齢

研究対象の美濃国の宗門改帳は、結婚情報の記載がとても少ない。そのため結婚が何歳で行われたのかを把握する事は難しい。そこで、結婚のタイミングに関するデータが得られない場合に、人口センサスの年齢別未婚者割合から静態平均初婚年齢（singulate mean age at marriage）を算出する方法を利用して分析していく。これは SMAM と略され、大抵の場合、静態初婚年齢が算出可能とされている（国際人口学会 1994: 521）。

ここでは 1868 年の大浦村、乙原村、南条村の 3ヶ村の情報を利用する。男子 632 人、女子 695 人、合計 1,327 人である。まず、この 1,327 人の個人データの続柄情報と名前の情報や年齢から、その人が結婚していた（既婚）のか、していなかった（未婚）のか、この情報からだけではわからない（不明）、という情報を新たに追加する作業から始めた。

宗門改帳の資料から、未婚か既婚かを判別する方法は、2通りある。1つは、結婚によって異動があったかどうかという、付箋あるいは朱書きで示されるイベント情報（例えば、「縁付け」「…以前に参候」）である。もう1つは続柄に結婚を意味する変更があったかどうかである（例えば、「娘」から「…女房」へ）。しかし、これらの情報は単年データであろうと、時系列的データであろうとすべて確認できるわけではない。配偶者の死亡や不在によって、判明しない場合もある。そこで、以上の情報によって判断できない場合には、一定の基準を設けて対処せざるを得ない（黒須 2005）。そこで本研究は黒須（2005）にならい、上記の方法で未婚か既婚かが判明しない場合において、50歳未満であり、子供がいない場合は、未婚とみなすことにする。この作業を経て、男女別に既婚、未婚、不明を年齢階級に分けて SMAM 分析を行った。

この方法で男子の静態平均初婚年齢は 28.1 歳、女子は 27.4 歳という分析結果になった。男子の結果は、西条村の平均初婚年齢 28.8 歳という速水（1992）の分析結果とほぼ変わらない年齢である。一方、西条村の女子の平均初婚年齢は 22.5 歳であり、本分析の結果と約 5 歳の差がある。宗門改帳から算出した平均初婚年齢は年齢構成の違いを加味していないため SMAM とは開きがある場合がある。しかし、1868 年の大浦村、乙原村、南条村の 3 ヶ村の 46～50 歳の未婚率（表 8）は当時の皆婚社会としては明らかに高い。この未婚女性率が高い理由の 1 つとしては、未婚・既婚者に分類した際に触れたように、配偶者の死亡や不在、または一度は結婚したが離縁して戻ってきたケースも含まれている可能性が大きい。大浦村、乙原村、南条村の 3 ヶ村の宗門改帳の情報では、出生と相果（死亡）、縁付情報は記載されている場合もあるが離縁情報は記載されていない。そのため 46 歳から 50 歳の未婚女性が一度は結婚していたのかは残念ながら明らかにできない。

表 8 美濃国（16-50 歳）の未婚率と静態平均初婚年齢（SMAM）1868 年 10 ヶ村

	男子	女子
16-20歳未婚率	0.96	0.99
46-50歳未婚率	0.00	0.15
平均初婚年齢 (SMAM)	28.13	27.38
合計(人)	632	695

そこで、宗門改帳に記載されているイベント情報（例えば、「縁付け」「…以前に参候」）を用いて、女性の平均結婚年齢を算出した。まず、記載されているイベント情報の和暦と年数を読み取り、それを西暦に直す作業を行った。次にイベント情報に記載されている西暦から宗門改帳が作成された年の西暦を引き、その年の差を計算した。そして、最後に女性の実際の年齢からその年の差を引き実際の結婚年齢を分析した。このイベント情報が詳細に記載されている女性のデータは 348 人分（1844-1870 年の 7 ヶ年、28 ヶ村）である。しかし、イベント情報の記載はあっても年齢が不明という場合が多く、実際は 239 人（1844-1870 年の 7 ヶ年、12 ヶ村）の結婚年齢しか得られなかった。イベント情報の記載が詳細にある対象者がとても少ないという点と、年代間が 25 年あるので、時代による変化の影響なども含めていることに注意しなければならないものの、初婚年齢を知る手がかりになることは間違いない。

この結果から、女性の当時の結婚年齢は 21.8 歳であった。これは SMAM 分析を行った結果（27.4 歳）より約 6 歳近く若い結果になった。この年齢は当時の西条村の女性の平均初婚年齢の 22.5 歳よりも若くなるが、ほぼ同じ時期、近い地域の結果としては適当な年齢である。これより SMAM 分析の際にも触れたように、27.4 歳と結婚年齢が高くなった理由として、配偶者の死亡や不在、または一度は結婚したが離縁して戻ってきたケースも含まれている可能性が大きいことが、結婚イベントによる結婚年齢の推定か

ら明らかにできたのではないか。ただし、先に述べたとおり、結婚イベントから算出された初婚年齢は年齢構成を加味していない点や、観察年に村内にいる者のみの情報であるという点には注意が必要である。

4. 結論

本研究では美濃国の1844年から1870年の7ヶ年、10郡34ヶ村のデータを利用し、人口・男女性比、続柄から世帯とライフコース分析、SMAM（静態平均初婚年齢）分析を行った。

美濃国の男女性比は各年齢グループで差はあるものの、平均107.0であり正常値の範囲内であった。平均世帯規模は4.62人であり、西条村の同時期における平均世帯規模と同じ傾向が明らかになった。夫婦組数は1組の世帯が最も多く、世代数は2世代で構成された世帯が多かった。

美濃国内での地理的な違いを平坦部・丘陵部に分け比較した結果、平均世帯規模は平坦部の方が丘陵部よりも大きい傾向が確認された。また夫婦組数はどちらの地域も1世帯に1組夫婦がいる世帯の割合が最も高かったが、より詳しく分析すると夫婦組数0組に地理的差がみられた。その結果、平坦部より丘陵部の方が夫婦組数0組が多く、単独世帯が多いことが明らかになった。世代数も平坦部・丘陵部ともに2世代で構成された世帯が最も多かった。しかし、1世代で構成された世帯には差がみられ、平坦部より丘陵部の方が1世代で暮す世帯が多いことが確認された。夫婦組数と合わせて考察すると、平坦部より丘陵部の方が夫婦組数0組の世帯が多く、また、1世代で暮す世帯が多いことから単独世帯が多かった傾向が明らかになった。

次に史料の残存状況から年代を1844-1845年、1859-1861年、1868-1870年に分けて分析した結果、平均世帯規模が4.16人から4.71人と大きくなり、男女性比も明治に近くなるにつれて安定的な数値の範囲内になった。世代数で分析してみると、世帯の中に3世代が一緒に暮らす割合が高くなっており、多世代化家族が多くなる変化を年代別分析より確認することができた。

次に戸主との続柄分析を行い、どのような親族と暮らしていたかを観察した。美濃国では男性が戸主を継承することが多かったが、女性が継承するケースも確認され、女性の戸主継承が決して珍しいことではないことがわかった。男性の戸主年齢を分析すると、51～55歳の年齢階級で最も高くなり、その後も高い戸主割合を維持していた。これは西条村における男性の死亡率と世帯主の隠居する平均年齢と符合していた。西条村の継承の特徴は死亡による継承が隠居より多かったことから、戸主の多くは死ぬまで戸主であり続け、戸主の継承は世帯主が死亡した時に移転されることが多いのが美濃国の特徴であることが明らかになった。

世帯の人口動態パターンと世帯の構成原理を把握するために、年齢別戸主割合と同じ方法で、戸主の妻との同居割合、親との同居割合、キョウダイとの同居割合を分析した。

戸主の妻の割合の分析から、女子の結婚は20代前半から行われ40代後半に一度、割合が減少している。しかし50代前半で再び割合が高くなり、再婚の可能性もうかがわれる。その後の割合は再び下がるが、これは配偶者との死別が要因であろう。次に戸主に対して「父」「母」という続柄をもつ人口の年齢別割合を分析した。親の割合が高くなるのは56～60歳前後である。男性の戸主割合とあわせて考察すると、美濃は隠居慣行が少ない地域であるため、前戸主（父）死亡後にその配偶者（母）のみが残り、「親」の割合が増加したことが考えられる。最後に戸主に対する年齢別キョウダイの割合を分析した。割合が最も高いのは21～25歳の年齢階級である。戸主割合が高くなる36～40歳の階級時にキョウダイとの同居の割合は下がっている。ここに直系家族世帯の世帯原理を垣間見ることができた。キョウダイのうちのひとりが戸主となると、その他のキョウダイはその世帯を離れる（離家）という世帯の戦略が美濃地域においてもあったことを示唆している。

最後にSMAM分析から、美濃国の特徴として男性、女性とも晩婚傾向がみられた。特に女性は高い結果が表れた。しかし、この分析は宗門改帳の資料から未婚か既婚を判別し分析していく方法であったため、未婚者の中に配偶者の死亡や不在、または一度は結婚したが離縁して戻ってきたケースも含まれていることに注意しなければならない。宗門改帳に実際に結婚情報の記載の残るデータのみを利用して算出した女性の結婚年齢は21.8歳であり、これは同時期における西条村の結婚年齢と類似する結果となった。

本研究の美濃国単年データ分析（7ヶ年、34ヶ村）は、西条村の長期に残るデータを基に研究を行った先行研究の結果（速水1992、浜野2011など）をより色濃く示す結果になった。世帯規模、初婚年齢さらには戸主の継承パターンにおいても、西条村の結果と美濃国の分析結果は類似していた。これは長期的なデータを基に分析した「点」的研究と、単年のデータを用いて分析した「面」的研究を繋げる結果となったといえよう。

付記

本稿は金親真理子の麗澤大学大学院言語教育研究科・比較文明文化専攻修士論文「世帯構造とライフコースの地域性—幕末明治の人口史料を利用して—」（2013年1月提出）の4章と5章をベースにさらに戸主との続柄分析を加えてまとめたものである。本稿で利用したデータは麗澤大学人口・家族史研究プロジェクト所蔵である。史料の利用と分析についてご助言くださった速水融先生、古文書史料の解読整理をされた成松佐恵子さん、基礎シートの入力をされた長谷川友美さんに心から感謝します。

参考文献

- Okada, Aoi and Satomi Kurosu 1998 "Succession and the Death of the Household Head in Early Modern Japan: A Case from a Northeastern Village, 1720-1870." *Continuity and Change* 13 (1): 143-166.

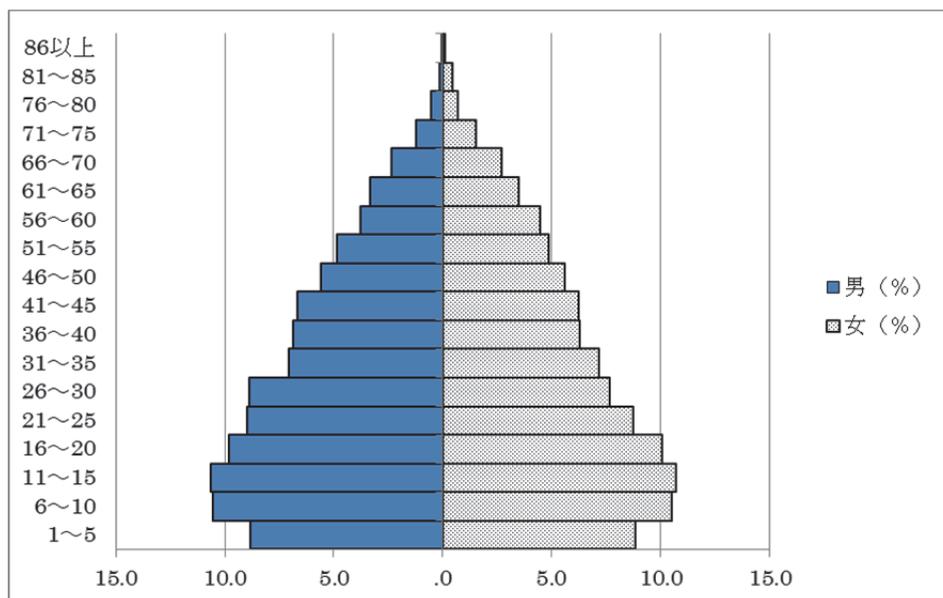
- 落合恵美子編 2006 『徳川日本のライフコースー歴史人口学との対話ー』 ミネルヴァ書房
- 加藤彰彦 2009 「直系家族の現在」『社会学雑誌』 神戸大学社会学研究会 26号: 3-18
- 木下太志・浜野潔編 2003 『人類史のなかの人口と家族』 晃洋書房
- 木村礎 1977 『旧高旧領取調帳 中部編』 近藤出版社
- 黒須里美 2001 「明治戸籍の分析と歴史人口学ー多摩戸籍からみる離家パターンと家族システムー」 pp.245-266 速水融・鬼頭宏・友部謙一編 『歴史人口学のフロンティア』 東洋経済新報社
- 黒須里美 2005 「近代移行期における出生と経済ー同居児法の多摩戸籍への適用ー」『麗澤経済研究』 13(1): 75-90
- 黒須里美・岡田あおい・速水融 2005 「近代移行期の家族と地域性: 庶民のライフコースと社会的ネットワーク」平成 14~16 年度科学研究費補助金 研究成果報告書
- 黒須里美 2008 「長期マイクロデータをめぐる動向: 歴史人口学研究の舞台裏」『人口学研究』 43: 49-56
- 黒須里美・津谷典子・浜野潔 2012 「徳川期後半における初婚パターンの地域差」pp.24-56 黒須里美編 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』 麗澤大学出版会
- 黒須里美編 2012 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』 麗澤大学出版会
- 国際人口学会 1994 『人口学用語辞典』 厚生統計協会
- 斎藤修 2001 「近代人口成長」 pp.67-89 速水融・鬼頭宏・友部謙一編 『歴史人口学のフロンティア』 東洋経済新報社
- 斎藤修 2002 「比較史上における日本の直系家族世帯」 pp.19-37 速水融編 『近代移行期の家族と歴史』 ミネルヴァ書房
- 斎藤修・浜野潔 2012 「離死別と家の継承」 pp.101-118 黒須里美編 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』 麗澤大学出版会
- 清水浩昭 1997 「世帯統計からみた家族構造ー日本の全体状況と地域性ー」 pp.57-72 熊谷文枝編 『日本の家族と地域性 (上)ー東日本の家族を中心としてー』 ミネルヴァ書房
- 中里英樹 2006 「加齢と親子同居ー濃尾農村における居住形態の動態的分析ー」 pp.207-230 落合恵美子編 『徳川日本のライフコースー歴史人口学との対話ー』 ミネルヴァ書房
- 永田メアリー 2006 「改名にみる家の戦略と個人の選択: 濃尾と東北の比較」 pp.141-182 落合恵美子編 『徳川日本のライフコースー歴史人口学との対話ー』 ミネルヴァ書房
- 速水融 1983 「幕末・明治期の人口趨勢ー空白の四半世紀とは」 pp.279-304 安場保吉・斎藤修編 『数量経済史論集 3 プロト工業化期の経済と社会』 日本経済新聞社
- 速水融 1992 『近世濃尾地方の人口・経済・社会』 創文社

速水融 2009 『歴史人口学研究—新しい近世日本像』 藤原書店

Wall, R., 1983 'Introduction' to R. Wall, J. Robin and P. Laslett, eds., *Family Forms in Historic Europe*, pp.1-63. Cambridge: Cambridge University Press.

付録

人口ピラミッド 7ヶ年（1844～1870年）34ヶ村



男女年齢階級別人口構成と性比 7ヶ年（1844～1870年）34ヶ村

男(人)	女(人)	年齢階級	男(%)	女(%)	性比
621	579	1~5	8.8	8.8	107.3
739	689	6~10	10.5	10.5	107.3
747	701	11~15	10.6	10.7	106.6
689	659	16~20	9.8	10.0	104.6
629	572	21~25	9.0	8.7	110.0
622	502	26~30	8.9	7.7	123.9
497	470	31~35	7.1	7.2	105.7
481	411	36~40	6.8	6.3	117.0
468	409	41~45	6.7	6.2	114.4
393	367	46~50	5.6	5.6	107.1
339	319	51~55	4.8	4.9	106.3
265	294	56~60	3.8	4.5	90.1
233	228	61~65	3.3	3.5	102.2
164	177	66~70	2.3	2.7	92.7
87	99	71~75	1.2	1.5	87.9
37	46	76~80	0.5	0.7	80.4
10	31	81~85	0.1	0.5	32.3
2	8	86以上	0.0	0.1	25.0
7023	6561				107.0

